

開催地名	愛知県田原市
開催日時	令和7年11月22日(土) 13:00 ~ 15:00
開催場所	田原文化会館 文化ホール
語り部	草 貴子(宮城県仙台市)
参加者	東三河地域防災協議会 198名
開催経緯	南海トラフが危惧される地域であることから、災害に対する備えや災害が起こった時にどう行動するべきかを、今回の講演を聞いて考える機会にさせていただきたい。
内容	<p>講演のテーマ「私の3.11と明日への備え」</p> <p>(1)自己紹介と防災への関わり</p> <p>私は昭和35年、知立地震津波の年に宮城県女川町で生まれ育った。実家は代々漁業を営んでおり、後に専業主婦として夫が単身赴任中に3人の子どもを育て上げた。私の人生は自然災害と切っても切れない関係にあり、生後3週間の時にチリ地震で津波を経験、昭和61年の水害、そして東日本大震災でも家を失った。自分の生まれ育った町や集落、そして家や大切な人を失うことはとても悲しいことで、防災に力を注ぐのはそんな経験があったため。</p> <p>災害はいつどこで起きるか分からない。だからこそ、日頃から学んだ知識や知恵を活かして被害を最小限にすることが大切である。その一人ひとりの行動が、国や自治体の進める防災・減災の一助にもなると信じている。</p> <p>また現在住む仙台市泉区は、人口21万3千人、北部に位置し、プロサッカーチームのベガルタ仙台のホームタウンでもある。東日本大震災時には津波被害はなかったが、ライフライン寸断や家屋損壊など被害があった。</p> <p>(2)町内会設立と避難所準備</p> <p>私が会長を務める市名坂東町内会は、今年で設立17年、加入数は186世帯である。単身赴任者や留守家庭が多いことから、災害対応をすべて求めることは困難であると認識しており、地域住民全員が協力できる体制を模索している。役員9名は全員女性であり、地域活動と家庭の両立を考慮し、身の丈に合ったオリジナルティのある町内会を作りたい、という気持ちで地域活動と家庭のバランスを取りながら活動をして町内会を運営している。町内会設立2年目には集会所を設立し、ライフライン寸断に備えてオール電化とし、トイレも障害者用を含め2カ所設置した。避難所では普段の生活に近い環境を再現するため、鍋や使い捨て食器、絵本やおもちゃも準備している。こうした備えは、いざという時の被害軽減や避難者の安心につながるものである。</p>

(3) 東日本大震災の経験と避難所運営

東日本大震災は3月11日、地元である仙台市立七北中学校(羽生結弦選手の母校)の卒業式の日が発生した。当時、近所で買い物をしていた時に、突然の強い揺れが襲った。建物や電柱がぐらぐらと揺れて今にも倒れそうだった。急いで自宅へ帰る途中、町内の人々が集会所の隣の公園に集まっていたため、集会所を避難所として開放した。女性や子どもを中心に100名ほどが避難してきており、4名の役員で備蓄米の選定や自宅から毛布を運んで避難希望者を受け入れた。

避難所運営では、リーダーと副リーダーを避難者の中から選び、町内会役員はサポートする形で。午前・午後にコーヒータイムを設けるなど交流の機会を作ることで、初対面の人同士でも会話が生まれ、心理的な安心につながった。ライフラインは電気が2~3日、水道は3~4日、ガスは1か月で復旧し、避難所は9日間で閉鎖した。

非常時には人間の様々な面が見えるもので、権利主張ばかりをする人、協力を拒む人もいれば、他者への思いやりを見せる人もいた。非常時には他者への理解と配慮が重要であることを痛感したのである。

(4) 自主防災組織と避難所運営委員会

自主防災組織として、仙台市立市名坂小学校区避難所運営委員会を平成25年に設立した。1万人以上の住民が住む地域で、小学校を拠点とした町内会、連合町内会、市民センター、児童館、民生委員、青年団、PTA、女性防火クラブなどの20の地域団体と連携し、行政支援に頼らず地域の力で活性化していこうという思いで立ち上げた。

運営委員会は総務、情報広報班、食糧福祉班、救護班、衛生班、女性コーディネーターの六班で構成され、女性ならではの視点で困りごとの解決や便利グッズの工夫を行っている。例えば、尿漏れパッド用の可愛い布袋やペットボトルオープナーの作成など、避難所生活での細やかな課題に対応している。

訓練も毎年実施しており、住民参加型の大規模訓練とは異なり、100名弱規模で各班の知見を深めるリーダーの為にリーダー研修会である。新型コロナウイルス感染症の影響で、避難所の収容人数やプライベート空間の確保が課題となり、課題に添った訓練を実施している。

(5) 避難所における弱者支援『ヘルプコーナー』

避難所では、妊婦や高齢者、障害者、外国人など、配慮を必要とする人々への支援が必要であるが、具体的にどのように対応しているのか知識を持っている人は少ない。

	<p>そこで、聴覚障害者協会の方を訓練にお招きしご意見をいただきました。</p> <p>また「ヘルプコーナー」を設置し、避難者の困りごとを聞き取り、タブレットなどで迅速に対応すること。素人の私達誰もが安心して避難できる環境づくりを心掛けています。運営委員のビブス着用や企業との連携、避難所規則の掲示など、避難所運営の効率化と安全確保も重視している。入口には規則5箇条を張り出し日本語、英語、中国語の3言語で作成し、協力・思いやり・弱者への配慮を促している。こうした取り組みを通じ、相手を守る、そして自分を守る等自主防災は日々進化している。</p> <p>(6)在宅避難と日常生活での減災</p> <p>在宅避難や日常生活での減災の基本は、整理整頓や備蓄の工夫である。米の精米や重要書類・情報の管理、火災保険への加入など、日常の準備が災害時の被害軽減につながる。家庭内では家具や冷蔵庫の転倒防止も重要である。</p> <p>故郷である女川町は、津波により人口の1割が亡くなるなど壊滅的な被害を受けた。避難所では協力や思いやりが試される一方、支援物資や来訪者の対応で苦勞も多く、被災者の立場に立った支援の重要性を実感した。震災を通じ、一人一人が自分事として行動することの大切さを痛感しており、地域防災は全員参加で取り組むものであると考えている。</p> 
<p>開催地より</p>	<p>今回の講演では、貴重なお話を聞くことができましたことに感謝申し上げます。</p> <p>参加者は熱心に聞き入る様子で、訓練などの具体的な話もあり、自主防災会の方には今後の取り組みの励みになったと思います。また、実際の体験談が聞けて良かったという声を多くいただき、語り部の方のお話は重みがあり心に響くものがあったと確信しました。今後も語り部の方に講演を依頼し市民の防災意識向上に役立てていきたいと思っています。</p>